ヘデラ
— 3. しかばねジャックと氷の心臓 —
絵：夜月銀
著：蔵野杖人
Sample
Sample
Sample

Sample

Sample

Sample

ヘデラ

J

――しかばねジャックと氷の心臓――

著：蔵野杖人
絵：夜月銀

Sample
Sample
Sample

Sample

・当作品、『ヘデラ　―――J　しかばねジャックと氷の心臓―――』には、
残虐、猟奇的、反社会的表現が含まれております。
・当作品はR-18Gゲーム『J　しかばねジャックと氷の心臓』の一部を
電子書籍用に整えたものです。
そのため、ゲーム内容と重複する部分がございます。
・当作品は周回プレイを前提とした作品のシナリオの抜粋です。
また、この書籍版ではストーリーの真相には触れません。
・当作品はフィクションです。
実在する人物、団体、歴史、宗教、人種、思想等とは関係ありません。
現実における反社会的行動を推奨するものでもありません。
・当作品の無断転載・無断複製は禁止させていただいております。

以上を無視され、結果生じたいかなる問題についても、
当方は一切責任を負いません。
あらかじめご了承ください。

目次

第一章　死体の少女　9
第二章　痛みと幻影　119
第三章　虚構の城　199
第四章　斜陽　259
第五章　ヘデラ　373
あとがき　411

Sample
Sample
Sample

どうか永遠に忘れないで。『私』のことを。

Sample
Sample
Sample

（前略）

エリザベスの頬から指をどけ、ジャックはそっと、少女の胸に耳を当ててみる。当然ながら何の音もしない、心臓がないのだ、聞こえる方が恐ろしい。少女は静かだった、泣きたくなるほどの静寂が、ジャックを満たす。彼は涙をこらえながら、瞬きをした。

棺の中にいるのかもしれない、と彼は思った。自分は、エリザベスと二人、棺の中にいるのかもしれない。土の中で朽ち果てるのを、二人で待っている。

自分はエリザベスを愛しているのかな、と、ジャックは、ぼんやりと考える。だが、それはどうにも、適当でないような気がした。きっと、違う。きっと自分は——この棺の中へ一緒に入ってくれる人間なら、誰でもいいのだ。自分と同じ、死体になってくれるなら、誰でも。メアリーでも、アリソンでも、自分は喜んで受け入れるだろう。なんと浅ましいのだ、俺と言う男は。あまりにも卑しい自分の有様に、ジャックは自嘲を禁じ得なかった。

「……エリザベス」

また、小さく、少女の名を呼んでみる。

「俺は、死にたい」

ジャックは掠れた声で、そう、言った。

Sample Sample Sample

「俺が生きてる意味なんて、どこにもないよ。あの日から、俺は、漫然と呼吸をし続けてるだけだ。八年間、罰も贖いもなく、漫然と」

こんな俺に、生きてる意味なんて、ないじゃないか。

少女は目を覚まさなかった。目を覚まされてもつらい思いをするだけなので、それはジャックにとって幸いだった。

（中略）

ジャックは明るさで目を覚ました。ここはどこだ、見覚えがない。靴を履きっぱなしだ、というか、ベッドではあるが、コートもスーツも着たままである。おかげで、体がひどく軋んでいる。ジャックは眉をしかめながら、ゆっくりと上半身を起こした。

「起きたか」

言われ、ジャックは声がした方へ目をやる。そうしてようやく、自分がどこにいるのかを思い出した。

「……アリソン」

朝の光が差し込む室内で、女は、ガウンのまま、そこに立っていた。オレンジがかった赤毛が、日の光に透けてきらきらと金色めいた光を放っている。太陽に似ている、とジャック

Sample

は思った。

「さあ、朝食を食べよう」

顔を洗いたい、だとか、今何時だ、だとか言うよりも先に皿を渡されて、ジャックはとりあえずそれを受け取る。白い皿の上には、昨日ジャックが持ってきたと思しきベーコンと、スクランブルエッグ、それからパンが乗っていた。ついでに、フォークも。

「……料理が出来るのか……」

「君も出来るだろう」

まあ、確かにジャックも、切る煮る焼くくらいはリービー老に仕込まれたが。料理を教えたあたりからして、彼はおそらく、ジャックが誰かと結婚するなどという未来を少しも考えなかったのに違いない。というか、テーブルはないのだろうか。ジャックは部屋を見たが、それらしきものは、書類の積まれた机くらいしかなかった。

「今日初めて、キッチンの入った部屋を借りて良かったと思ったよ」

言いながら、アリソンは書類の上に皿を乗せて、椅子に座る。いいのか、それ、そんなところに乗せて。そうは思ったが、ジャックは黙って、卵をフォークで掬い、口に入れた。

「今日は悪かったな。その……寝てしまって」

泣いて、とは、言わなかった。だからジャックも「気にしてない」とだけ返す。元より、あんな状態の彼女を置いて帰るつもりもなかったのだし。

Sample

「……明日も、こういう風に出来たら」
「うん？」
「明日も……君と……」
アリソンはそこまで言って、「いや」と首を振った。
「明日も来い」
そう命令する女の顔は、真顔だった。なぜ――と、問うほど、ジャックは馬鹿ではない。だから、青年は苦笑しながら答える。
「……命令しなくても、誘ってくれれば、来るよ」
「……そうか」
その答えに、女は一瞬だけ、どこか安心したような、それでいて不安に怯えるような笑みを浮かべた。だがジャックがそれに対して何を言うより先に、それをすぐさまいつものものへ変えると、あっさりこう言い放ったのだった。
「では、それを食べたら早く帰りたまえ」
まったく、理不尽だと思う。

◆

Sample
Sample
Sample

いつだって、良くないものは、墓の下からやってくる。

◆

帰ってきたジャックを見ても、エリザベスはおかえりと言っただけで、別段、何も言わなかった。ただ、やはり、昨日のことを――死体の継ぎ接ぎであるという事実について問うてきたことを――考えると、アリソンがあんな状態であった以上仕方がなかったとは言え、一晩放っておいたことを、彼は些か、後悔した。だが、訳を話すわけにもいかない。溺れていたことも、アリソンのことである、勝手に他人へ話されるのは嫌がるだろう。

だから、ジャックは、先日と同じようにこう提案したのである。

「散歩へ行かないか？」――と。

結果、ジャックとエリザベスは今、二人並んで、ぼんやりと街路を歩いているのだった。人はそう多くもない。おかげで、彼は、割合穏やかに街を歩くことができた。

本当ならば、マーケットの方へでも行って、広場で行われるという曲芸や人形劇などを見せてやりたいのだが、如何せん、そのような人混みへ行くと、ジャックが倒れる。ままならないものだな、などと思いながら黙って歩いていると、不意に、エリザベスが口を開いた。

「……別に、私は機嫌が悪いわけではないぞ？」

Sample Sample Sample

「え？」
驚いて立ち止まり、少女の方へ目をやると、彼女も同様に、彼の方を見上げている。
「私の機嫌が悪いから、機嫌を取ろうと思ったのだろう」
「……あ、い、いや、そういうわけじゃないんだけど」
確かにそうも取れるな、と思わず吃ってしまうと、エリザベスは、そんな彼を見て、ふ、と口元を緩めてから、青年を促すように先へ歩き始めた。
「確かに、お前があの女のところで夜を明かしたのは多少なりとも気にならないわけではないが……私自身、あんな話をした後で、お前とどう過ごせばいいのかわからなかったのも確かだからな。頭が冷えて良かった」
そう言われても、当然、はいそうですかと楽観的になれるものでもない。ジャックは何を言うこともできず、押し黙る。

（中略）

「メアリー」
「な、何？」
「帰れ」

Sample Sample Sample

命令口調で彼女に何か言うのは、もしかすると初めてだったかもしれない、とジャックは胸の底の、いくらか冷静なところで思った。自分の声の、低く冷ややかなことに、自分でも驚く。こんな声が出せたのか、そんなどうでもいいことが頭をよぎって、ジャックは唇を歪めた。無論、半分は、メアリーへの怒りから。

「で、でも、ジャック」

「君――よく、あんな話を聞かせたあとで、俺と食事をしようだなんて言えるな。元々俺が食事なんてそれほど好きなやつじゃないって知ってるだろ？　その俺が、わざわざ、君と。食事をするだなんて、考えられないことだってわからなかったのかよ」

「……っ」

「俺は、君を、それほど馬鹿なやつじゃないと思ってた。でも、考えを改めるよ。君は疑いようのない馬鹿だ」

メアリーと会話するために開いていた扉を、さらに、わざと大きく開いた。メアリーが、大きく動いた扉にびくりと肩を震わせる。

「帰れ」

もう一度、ジャックはそう言った。小柄なメアリーは、背だけは高く育った自分に睨まれて、すっかり萎縮している。大きな青い瞳には既に涙が溜まり始めていて、怒りを露わにするジャックの罪悪感を刺激しようとしているようにすら見えた。ああ、そうだ、この姿は、以前

Sample

ジャックが『もう俺の世話を焼くな』と言った時のそれに似ている。その事実に、彼はまた苛立ちが募るのがわかった。

（中略）

「寝付くまで見ておいてやるから、さっさと寝ろ」
「……眠れない……」
「どうして」
「こわい」
答えは短く、そして稚拙な響きをしていた。ジャックはそのアリソンらしからぬ、呂律の回らない言葉に、訝しみながら彼女を見る。
「怖い？」
「こわい……ヴィクターが、こ、こっちを見てるんだ」
「見てる――って――」
鸚鵡返しに反してみてから――ジャックは、ぞっとした。苦悶の表情を浮かべたアリソンの目が、明らかにどこか違うところを見ていたからだ。いや、焦点は、ジャックにある。だが、おそらく、彼女の脳は、ジャックの像を結んでいないだろう。そう言う目を、彼女はしていた。

Sample Sample Sample

（中略）

だめだ――紅茶に映る自分の顔は、最早ただの敗残者のそれだった。みじめで哀れな、打ちのめされた人。それが今のジャックであった。アリソンに何かを言われる度、「もしかするとそうであるのかもしれない」と思えて仕方がないのだ、その真偽に関わらず。いや――それが真実であるように、思える。

「ジャック」

優しげに、アリソンが、アリソンの声が、ジャックの耳朶を打つ。

「大丈夫だ――何にも心配ないよ」

何にも。女の声は、赤い水面など少しも揺らさず、ただジャックの意識だけを揺らして、散った。それは、ひどく――甘いような眩暈に感じられるものであった。

（中略）

「エリザベス」

喉が、苦しい。めちゃくちゃになる。頭が、世界が、ぐちゃぐちゃになる。

Sample Sample Sample

「君たちの言う愛って、一体、なんなんだよ」
「……ジャック……」

（中略）

だって、アリソンは、自分を愛しているとは絶対に言わない。
「なあ、ジャック」
「うん？」
「二人で、田舎に行ってさ。一緒に過ごしたいなあ」
「ああ、いいなあ。でも、俺は何にもできないぞ？」
「大丈夫だ、私がなんでもやる。私は少なくとも君よりは要領がいい」
「違いないな」
そう頷くと、アリソンが、「そこは否定しろ」と一層笑った。
「君は、一人でちゃんと生きていけるのかなあ」
「……どうだろう」
「そこは肯定しろ、ばか」
そんなことだから不安なんだ、と唇を尖らせて、アリソンは、抱えていた足を床へ投げ出

Sample Sample Sample

すようにして背筋を伸ばす。やはり、彼女は背が高いのだなあ。ジャックは彼女のすらりと伸びた足を見ながら、ぼんやりと思った。

（後略）

Sample
Sample
Sample